

2019年11月20日

天理大学アメリカス学会第24回総会・年次大会のご案内

去る6月29日（土）～30日（日）に天理大学を会場に開催された第29回日本移民学会年次大会では、天理大学アメリカス学会と共催して頂き、誠にありがとうございました。至りませんでした。日本移民学会のご支援でなんとか会場校の仕事ができました。

この共催を記念して、天理大学アメリカス学会発行の『ニューズレター』第81号の巻頭言「日本移民学会第29回年次大会（天理大学）を振り返って考えたこと：宗教が繋ぐ移民のトランスナショナルな関係について」を日本移民学会会長浅香幸枝先生にご寄稿頂きました（URL: <http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/files/newsltrcontent.html>）。

また、11月30日（土）に行われる天理大学アメリカス学会第24回年次大会では、日本移民学会前会長高木真理子先生に記念講演「楽園ハワイの一面―観光客から隠された姿に注目して―」をお願いしております。詳細は下記の通りです。

概要：多くの日本人にとって、ハワイはいまだに芸能人御用達の憧れの観光地であろうし、「ハワイアン」音楽の流れるリゾートである。ハワイと日本との繋がりは深く、昨年2018年は、ハワイに最初の移民の一団「元年者」が渡ってから150周年の年であった。さらに、カルチャーセンターなどでフラ（Hula）を習っている方々にとっては、ハワイはフラの発祥地である。もちろんハワイと聞いて、つらい農場労働で苦労を重ねた移民一世の姿よりは、海を見下ろす高層ホテルの海側の一室からの景色や、色とりどりの花、ギターが奏でる静かなメロディー、フラの踊り手などを思い浮かべる人が多いのではないかな。

今回はハワイの先住民から現在のハワイを見るとどのような姿に映っているのか、先住民の視点から、特にハワイにやってきた移住者たち（settlers）の足跡を見てみたい。ハワイはもともとハワイ人の独立国であったものが、「多民族国家」であるアメリカによって植民地化され、今の姿につながっている。ハワイの住民は過半数が非白人（non-white）であり、それが米本土の社会との大きな違いだと言われる。しかし、「非白人」でも先住民ハワイ人とアジア各国／地域からの移民とでは、その経験に違いがあるのは当然であろう。ハワイの歴史のひとつの見方として、あえてアジア移民をハワイの settlers として扱うという、ハワイ人の側の主張の一端を紹介したい。

開催日時：2019年11月30日（土）

場所：天理大学9号棟ふるさと会館1階会議室1・2

13：40 年次大会開会の挨拶

13：45 研究発表1 森田成男

演題：「1980年代の米国の「新自由主義」経済への変貌を読み解く」

14：45 研究発表2 橋本和美

演題：「集団でのスペイン語学修におけるコーチングの効果と問題点」

15：45 休憩

16：00 記念講演 司会：

高木（北山）眞理子氏（愛知学院大学教授、日本移民学会前会長）

演題：「楽園ハワイの一面—観光客から隠された姿に注目して—」

17：30 閉会挨拶